

元風船爆弾製造動員女子生徒による証言会

会 場：明治大学生田キャンパス メディアホール

13:30～13:50 登戸研究所・風船爆弾の概要について(館長 山田 朗)

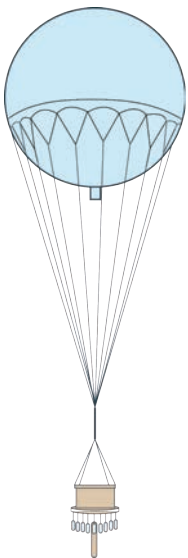
13:50～14:50 証言会

登壇者(五十音順)

上野高等女学校 39 回生 田邊浩子氏 新京敷島高等女学校 21 期生 崎山ひろみ氏
高崎高等女学校 45 期生 牛込やす子氏, 川野堂子氏, 銀川きよ子氏, 瀬川ひさ子氏, 村田喜代子氏
インタビュアー 渡辺賢二/司会進行 山田 朗

14:50～15:00 質疑応答

※明治大学平和教育登戸研究所資料館は 16:00 まで開館しております



風船爆弾とは？

和紙をコンニャク糊で貼り合わせた気球に爆弾を吊るし、米国を直接攻撃する「最終決戦兵器」として陸軍登戸研究所が研究開発した兵器です。

1944(昭和19)年11月～1945(昭和20)年4月にかけて、一宮(千葉県)・大津(茨城県)・勿来(福島県)の3地点より9,300発ほどが米国に向けて放球され、約1,000発が到達したといわれています。

民間人6名が犠牲になったほか、山火事などの被害を米国にもたらしました。

※詳しくは受付で配布中のガイドブックをご覧ください。

風船爆弾と女子生徒の関係

風船爆弾の製造は、日本各地で動員された10代半ばの高等女学生らが担いました。薄い和紙を数枚貼り合わせてつくられる風船爆弾の気球には、手先が柔らかな女子が適しているとされたのです。今回の証言会では、東京(上野)・群馬(高崎)・満州(新京)で動員され、風船爆弾を製造した方々をお招きし、どうやって風船爆弾を作っていたのか、そのときの様子などをお伺いします。

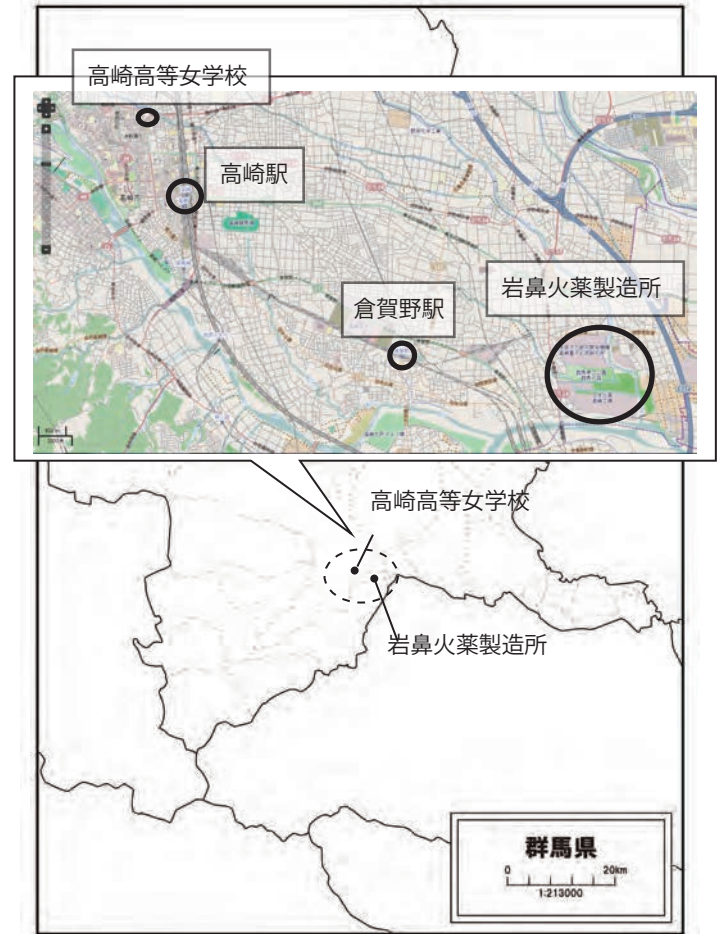


資料① 各高等女学校の場所



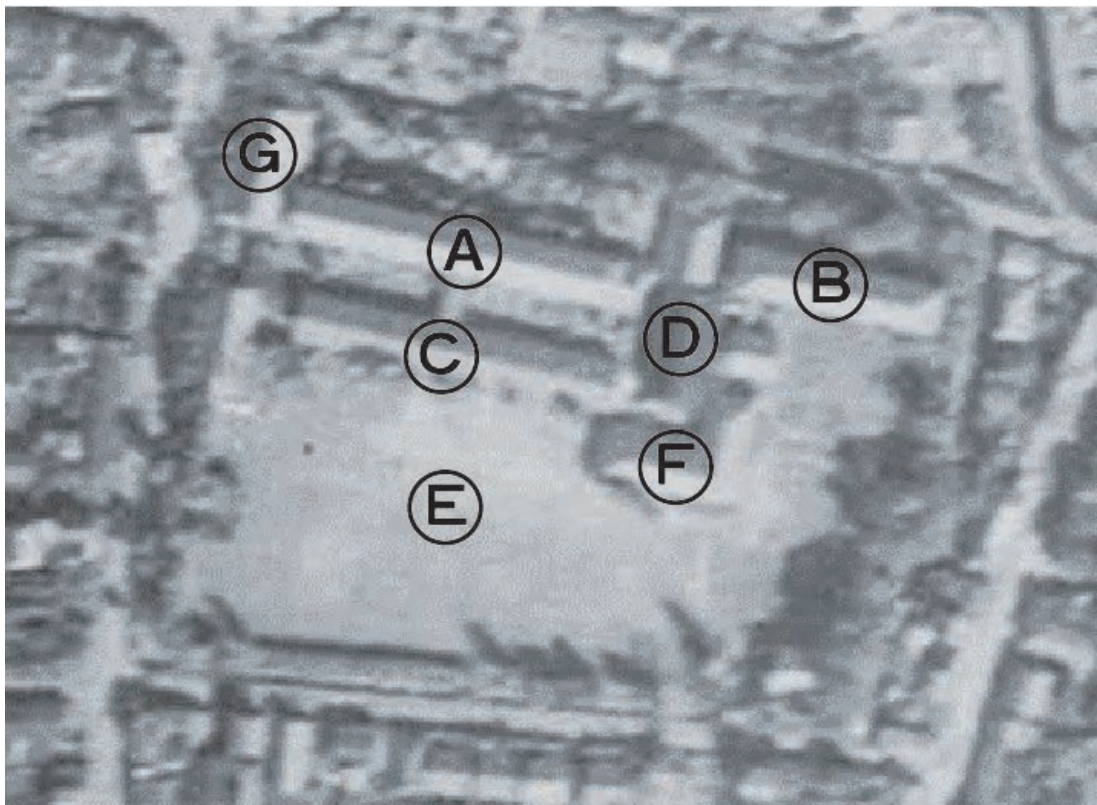
白地図：白地図専門店 (<http://www.freemap.jp/>)
 ※国境は現在のものです

資料② 高崎市内拡大図



地 図：© OpenStreetMap contributors (<https://openstreetmap.jp/>)
 白地図：白地図専門店 (<http://www.freemap.jp/>)

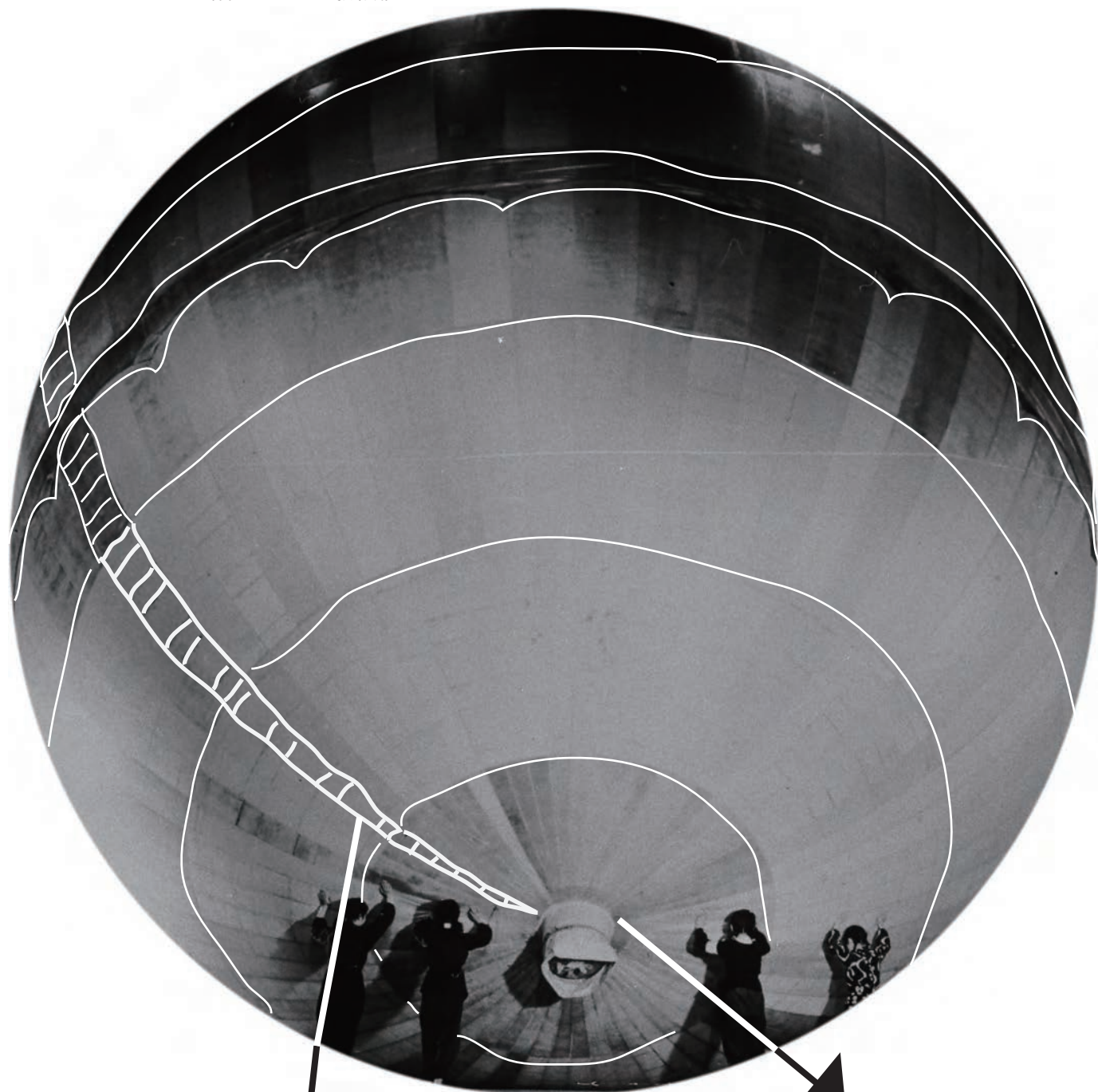
資料③ 高崎高等女学校 航空写真



- A 本校舎
- B 東校舎
- C 南校舎
- D 体育館
- E 校庭
- F 炊事場
- G 講堂

資料④ 気球

1944（昭和19）～45（昭和20）年，小倉陸軍造兵廠で撮影された風船爆弾「満球テスト」写真より（林えいだい氏所蔵）



川野氏が担当していた「口金」部分

気球はたくさんの紙片から構成されていることがわかります。紙片は、畳1畳分ほどの和紙3～5枚をコンニャク糊で貼り合わせた後、型紙に沿って裁断して作ります。こうして作られた細かい紙片を、コンニャク糊で貼りつけて、直径10mもの巨大な気球は作られます。

このすべての工程を、女子生徒が中心になって行いました。
※この図では、紙片のようすがわかりやすいよう、一部分のみ白線で縁取っています。

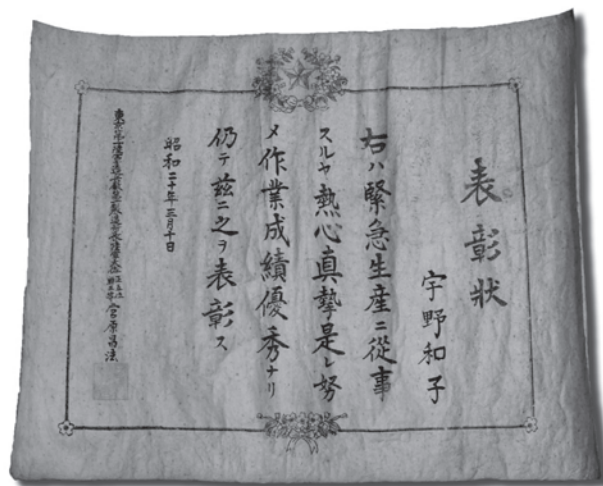
資料⑤ 和紙を貼り合わせているところ

1944（昭和19）～45（昭和20）年、小倉陸軍造兵廠で撮影された（林えいだい氏所蔵）



資料⑥ 上野高等女学校生徒に贈られた

表彰状（鈴木和子氏寄贈）



※資料館で複製展示中

資料⑦

気球製造工程

（『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第1号, p.60 に加筆）



4. 貼り合わせた和紙（原紙）の乾燥



1. 製造工場の様子（陸軍小倉造兵廠）
並んでいるのは「三角乾燥機」。この台で和紙貼り合わせが行われた。



2. コンニャク糊製造



3. 和紙貼り合わせ



5. 化学処理
原紙をアルカリ溶液かグリセリン溶液で煮ているところ（どちらの行程かは不明）。

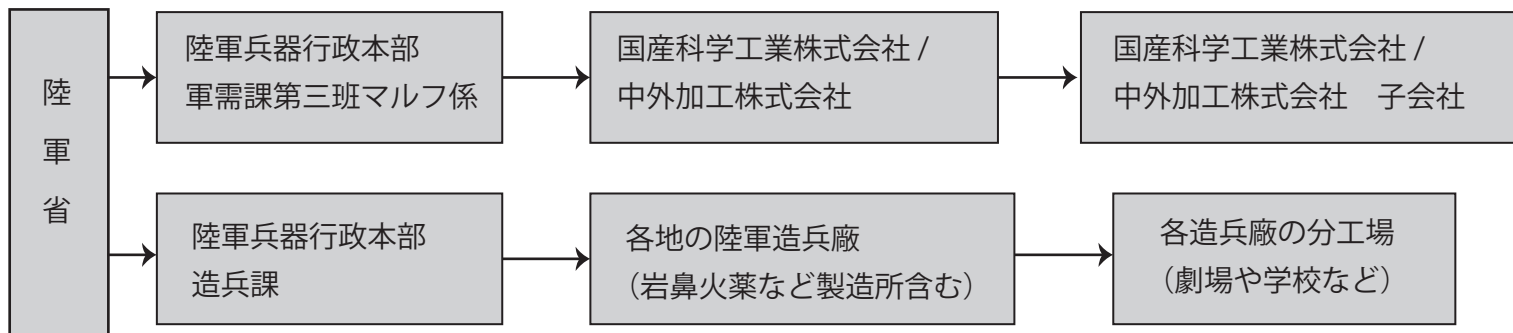


6. 原紙の検査
貼り合わせた和紙に「ウキ」がないかなど入念にチェックする。



7. 気密度検査（満球テスト）
空気を入れ、気体漏れがないか最終確認を行う。

資料⑧ 製造命令系統



陸軍造兵廠，もしくは陸軍の下請け会社である国産科学工業株式会社・中外加工株式会社が陸軍兵器行政本部より命令を受け，気球製造を請け負っていました。造兵廠および両社は，劇場や学校などを分工場・子会社に指定し，そこに女子生徒らを動員して，気球製造にあたらせました。

（参考文献：明治大学平和教育登戸研究所資料館『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第1号）